

国際価値問題の最終解決とその意義

2011.11.21 塩沢由典

(1) 前提となる話：「価値の理論」

日本での特殊事情 >> 価値論=マルクスの価値論 ☆これはちょっと特殊

新古典派でも

①J.R. Hicks Value and capital 1939

②G. Debreu Theory of Value 1959

③J.M. Keynes 1936 "theory of value"が9回現れるが、1例をのぞいて実質的にはマーシャルの価格理論を意味している。おもしろいのは、需要供給の理論には否定的な点(第2章、利用資源を所与としている点を批判。)

二大価値論

①古典派価値論

Ricardo, K. Marx, P. Sraffa

②新古典派価値論

Malthus, Senior, Jevons, Marshall, Arrow & Debreu

折衷派 A. Smith, J.S. Mill

Ricardo の直後から、「需要供給理論」への反動 Cf. M.Dobb『価値と分配の理論』

(2) 対立軸はなにか：労働価値説？

リカードとマルクスのあいだにも相違がある。

リカードの「労働価値論」 マルクスの生産価格論と同値

生産財を通して価値移転(国際貿易論:リカードは労働投入のみの生産を考えた?)

経過時間にしだがつて利潤も加算(Sraffa, J. von Neumann)

需要・供給の関係が、交換価値を決めるのか？

古典派価値論 すくなくとも近代工業では。経済の中核は工業的生産される。

需要供給理論 工業製品でも、その他の希少財でも、原理はおなじ。

(3) 現代に続く対立

需要供給理論

新古典派、オーストリー学派

限界分析、一般均衡理論、マクロの生産関数(Solow, Prescott, D.Romer)

所与の資源を使い切る経済

☆必然的に、完全雇用、完全稼働(自由財以外には)

対立する学派

マルクス派, Sraffa, Pasinetti

☆ケインズ反革命はなぜ起こったか。

ケインズ経済学 理論的基礎の弱さ >> 現代の古典派(New Classical)の台頭

基礎の弱さ：なぜか

マーシャル経済学からの脱却が不十分

どうすべきか => (8)

(4) 古典派価値論の再構築／再出発

『商品の商品による生産』(スラッフアの遺産)

①投入消耗財

②耐久資本財(von Neumann>>結合生産)

③地代(Sraffa, フランス)

生産の理論

新古典派：生産関数(生産可能集合) $Y=f(L, K)$

スラッフア、von Neumann、森嶋通夫：投入係数

ある財の生産量 $y \rightarrow y \cdot (a_0, a_1, \dots, a_N)$

これは「価値と分配の理論」を考えるにあたり、決定的な相違。

☆最少価格定理 固定係数の多数技術の選択

可変係数は資源の完全利用に必要なだけ

しかし、古典派価値論には、弱みがあった。

(5) 古典派価値論の弱い環と新古典派経済学の成立

リカード以来の「弱い環」があった。

リカード『原理』(1817)第7章

「一国において商品の相対価値を規制する同じ法則が 2 国あるいはそれ以上の国の間

で交換される商品の相対価値を支配するわけではない。」

マルクス『資本論』(1867)第 22 章

「国際的適用においては、価値の法則はなおさらに根本的に修正される。」
両者とも、この問題に「答え」を出すことはできなかった。

この点が、J.S.ミル以降、古典派価値論の衰退の原因の一つとなった。

二大価値論の分岐点 J.S.ミル

J.S.ミル個人 経済学においては James ミルの忠実な息子

リカードを覆す主観的意図はなかった。

Essays on some unsettled Questions of Political Economy (1844)

Preface: 1829-30 年に執筆された。

第 1 論文 Of the Laws of Interchange between Nations; and the Distribution of the Gains of Commerce among the Countries of the Commercial World

起源は、1820 年代の研究会？

一般的解説

リカードは、貿易される財の相対価格がどう決まるか説明できなかった。

この問題を J.S.ミルが解いた(1844, 1848)とされる。[相互需要説]

J.S.ミルはなにをやったか。

2 国 2 財、完全特化の場合(第 1 図参照)

A 国は第 1 財に、B 国は第 2 財に完全特化、線形の技術では 2 財の生産量が確定。

A 国と B 国の所有生産物が確定していて、交換比率を求める。

=> 純粋交換経済の原型

J.S.ミルの『政治経済学の原理』(1848)

基本はリカード価値論(工業製品)

例外：非生産物、農業製品、国際貿易 => これらは需要供給の一般理論で

ミルの権威が続く間は、この 2 元価値論が通用した。

しかし、結局は、限界革命=新古典派成立を誘導した。

イギリス・限界革命

Jevons ミルを含めて古典経済学批判の急先鋒

しかし、かれの交換の理論は、J.S.ミル(1844)第一論文の影響下にある？

状況証拠？：交易団体(交易団体に国をも想定)

Edgeworth 有名な Box diagram これも、ミルの図解化と解釈できる(第 2 図参照)。

古典派価値論から新古典派価値論へ

何が変化したか

J.R. Hicks(1981) Plutology から Catalactics へ(18世紀の用語)

井上義朗(2004) 生産経済の理論から商業経済の理論へ

19世紀後半に、なぜこのような「視点の移動」(Hicks)が起こったのか

J.S.ミルの国際価値論「解決」の影響も

(6) 古典派価値論と新古典派価値論--基本的対立はなにか

新古典派

生産要素が所与 資本・労働(異質労働力)・土地(耕地、森林、牧草地、etc.)

生産は、生産要素を変化するだけ $(y_1, y_2, \dots, y_M) = f(x_1, x_2, \dots, x_N)$

生産関数 f の微分可能性+一次同次

$$p_1 y_1 + p_2 y_2 + \dots + p_M y_M = r_1 x_1 + r_2 x_2 + \dots + r_N x_N$$

- ・財の価格は、効用関数(選好順序)によって定められる。
- ・生産は、要素価値を生産物価値に転換しているだけ。

☆需要の強さが価値を決める(主観価値)

古典派(リカードが典型)

利用可能な生産要素の量は、経済が決める(経済過程の自律性=散逸構造)。

価格は、生産費(労働・投入財の費用+支配時間あたり利潤)

☆客観価値説(生産技術+利潤率)

数量(リカードでは明確でない。マルクスはもっと自覚的) 需要の大きさ。

生産技術 第 j 製品を y_j 量生産する \rightarrow 1期前の投入 y_i (a_1, a_2, \dots, a_N)

ある意味で dual systems theory(2元システム論)

☆価値の体系と数量の体系の相対的独立性、両者の間歇的干渉

賃金率・利潤率・地代の決定機構は、それぞれ異なる。

方法論上の対立

新古典派 均衡

古典派 過程

L.アルチュセール：マルクスの弁証法の転換の「合理的革新」=「過程」の導入

processus sans Sujet in Fin(s) 「進化論的視点」とも

文献的には フランス語版『資本論』第I巻第7章注1、「労働過程」に注記

(7) 国際価値の理論

経済学の中心的議題

国際貿易政策 リカード時代(穀物法)、現代(TPP: 後出 第8節)

グローバル化時代には、この「欠落」の意味はより重大なものに

John Stuart Mill 以降の国際貿易論／国際価値論

新古典派：

Heckscher-Ohlin-Samuelson の理論(1948)

これ以前は、ほぼ一般均衡理論(交換経済)の範囲内。

HOS は、初めての国際経済固有の理論。

新古典派貿易理論の問題点

しかし、要素価格均等化定理は、いかにも非現実的。

欧米と日本(あるいは中印)か同一賃金率？ 開発経済学は？

「貿易の利益」だけか。 国際政治経済学の独自の発展。

その後の発展

Krugman の新貿易論

Melitz らの新々貿易論

リカード・マルクスの系統

冬 Graham (1923, 1932, 1948)

春 Mckenzie(1954a, 1954b, 1955) & Jones(1961)

夏 Steedman(1979a, (Ed.)1979b), Metcalfe

マルクス(一部、近代経済学も：小島清)

国際価値論争(1936-1960's) 名和統一、木下順二、ほか

けつきよくは文義解釈に終わった。

塩沢由典

戦略的選択 古典派の「弱い環」×リカードと HOS の共存

Sraffa(1960)の欠落 投入財の貿易＝中間財貿易

「国際価値論のために」 I (1985), II (2007), III(未公刊) (IIIはIIの解説。)

I と II のあいだ

I は 2 国 N 財・技術選択 賃金率・価格決定⇒貿易の利益・不利益、成長経路

II は M 国 N 財・技術選択 生産可能集合の形状と賃金率・価格ベクトル

III は 定常循環、正則領域、国際価値(賃金率・価格ベクトル)

世界需要が同一正則領域内にあるかぎり、国際価値は一義的に定まる。
ミルの解決を否定、リカード貿易問題の最終解決。

対比：

マルクス派 vs. 塩沢 生産価格を採用、「上乗せ率を帰結する複占競争」(1984)

ネオ・リカード派 vs. 塩沢 NR は利潤率を動かしてみた。これは手に負えない。

塩沢は、上乗せ率(markup rate)を固定

Mckenzie & Jones vs. 塩沢

M. & J. とともに「投入財の貿易」の重要性を意識しながら、乗り越えられなかった。

(8) TPP 問題あるいは現代の貿易問題

「国論を2分する問題」？

政治・官僚・圧力団体・マスコミ・学界

貿易摩擦を分析する経済学？

Heckscher-Ohlin-Samuelson では、失業も倒産もない。=> 貿易摩擦もない。

国際政治経済学(1970's以降: 英 Susan Strange, 米 Nye, Koehane)

リカード・スラッフア貿易理論

貿易の利益(実質賃金の上昇、過渡的には失業も)

アメリカの言いなり？

経済産業省(外務省) じつは「外圧だのみ」の戦略では？

日本のことを考えるなら、も米に勝てるだけの理論武装すべきだ。

賛成派(貿易立国だけを考えているが、それで十分か?)

(9) ケインズの構想と古典派価値論

ケインズ再興への Research Program

古典派(リカード)の全体構想に戻る必要

塩沢由典「ケインズの構想と古典派価値論」(12月3日、上智大学)

ケインズとスラッフアの結合

スラッフア 価値の次元 数量と関係なく決まる。

ケインズ 数量か数量を決定する関係に注目。(夾雑物が多すぎた。)

ケインズ学会(日本) 第1回大会報告 2011年12月3日@上智大学

構成

- 1 ケインズに戻れ 1
- 2 ケインズ派の経済学とその問題点 2
- 3 新しい挑戦 8
- 4 オクスフォード経済調査の意義 16
- 5 過程分析という枠組み 26
- 6 生産の貨幣的理論 34
- 7 古典派の伝統におけるケインズ 42
- 8 古典派価値論と数量調節 48
- 9 過程分析における有効需要 53
- 10 設備投資と利子率 60
- 11 金融資産市場と景気循環 67
- 12 結論 72

☆金融資産市場の分析、実体経済と金融市場経済との関連などは、まだ未成熟

[参考文献]

Stigler, George J. (1958) Ricardo and the 93% Labor Theory Of Value, *The American Economic Review* 43(3): 367-367.

他は、国際価値論のためにⅢの文献表を参照してください。他は、国際価値論のためにⅢの文献表を参照してください。